(5) 大内峠古戦場

慶応四年(一八六八) 八月二十九日、下野街道筋を北上してきた芸州藩を主力とする西軍は、大峠（松川新道）を越えて会津に入って来た別隊と田島宿で合流。翌三十日には進軍を開始し、大内村の端村である沼山で戦闘後、三十一日には大内宿に入った。大内宿にはこの後通過した藩も含めるとその数は十二藩にも及んだと云います。

大内宿で陣を張った西軍は九月一日進撃。すでに大内峠まで撤退を余儀なくされていた会津軍は、稜線沿いに軍を敷き、進撃してきた西軍と追分沼(現在の大内ダム内)周辺において激しい戦闘に入りました。会津軍にとって大内峠は越えさせてはならない南側最後の要所だったのです。

この峠を挟んでの戦闘は熾烈(しれつ)を極め、会津軍守備隊約八百名の内、城内に戻った者はわずか三十名との記述も残っているほどです。会津軍は大敗し、西軍は九月五日に若松に侵入ました。

現在もその惨劇を物語るように、旧街道の所々には戦死者の墓標が見られ、追分沼には戦士二十四人の墓が、峠を越えた栃沢には土佐藩士七士の墓が西軍の墓として残り、大内宿には会津藩士笹沼金吾の墓が、関山宿近くには会津藩士四十人の墓が街道沿いにひっそりと建っている。